日独整形災害外科 Fellowship Program に参加して

整形外科学教室　助教　藤城　高志（平成 20 年入局）

2018 年 11 月 11 日から12 月 2 日の間、日独整形災害外科に参加させていただきましたので、ご報告いたします。

ボルドー留学中、妻が“ドイツのクリスマスマルシェに行ってみたい”ということで、ベルリンには一度訪れたことがあります。その時のドイツの印象は、フランスと比べると公共交通機関やレストランも非常に時間通りできっちりしており、とても過ごしやすかった印象でした。筑波大学の吉沢知宏先生、岡山大学の釜付祐輔先生が関節チームとして、弘前大学の浅利亨先生と私が脊椎チームとして2018年度のこのプログラムに参加しましたが、このフェローシッププログラムではドイツをぐるっと一周まわるように計画されています。また、このプログラムでは飛行機の移動や宿泊先はあらかじめ手配されており、何とも気楽でまさしく“大人の修学旅行”という感じで、非常に楽しみにして行ってきました。

ベルリンのTegel International Airport に到着し、翌日 Rostock に移動しました。ベルリンからはアウトバーンを使って車で移動しましたが、200km/h で走る車に初めて乗り、早速ドイツの洗礼を受けた、というところでしょうか。

Rostock はベルリンの北西部にある港町です。大きな街ではありませんが、たくさんの海鳥とともに潮の香りも少し感じることができ、最高の雰囲気でした（訪れた病院のスタッフは“夏はもっと最高だ”とのことでした）。

ここではRostock 大学を訪れました。Rostock 大学の整形外科のChief であるMittelmeier 教授は日独整形災害外科学会の理事を務められており、非常に親日家で何度も来日されたことがあるようです（写真 1）。Mittelmeier 教授とスタッフに自己

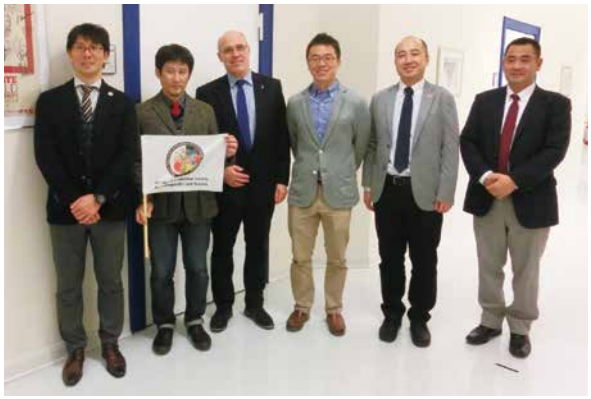

写真 1.

紹介のPowerPoint を用いたプレゼンを行った後、Rostock 大学のOrthopaedic Department を案内してくれました。Rostock 大学整形外科は基本的に関節外科が専門です。大学病院ということもあってか今回訪れた3 施設の中では最も研究活動にも力を入れていました。特にバイオメカに関する研究が盛んに行われているようで、海外からの留学生も多く受け入れています。私は専門外のために研究の内容について詳しく述べることはできませんが、関節班の先生は訪問されればとても楽しめるのではないかと思います。

翌日、脊椎チームはベルリンの近くのKremen という町に移動し、Sana Kliniken Sommerfeld という病院を訪れました。この病院は広大な敷地にある

写真 2.

古い建物を改築しており、まるで中世ヨーロッパにタイムスリップした気分になります（写真2）。しかし、内部はリノベーションされ、非常に近代的で広々としており、自然に囲まれたこのシチュエーションは、患者が療養するのに最適な環境と感じました。

この病院で脊椎外科のChiefを務めるDr. Kroppenstedtは身長2mもあろうかというほどの大男です（写真3）。一方手術はその大柄な見た目とは反対に非常に繊細で、顕微鏡をうまく使い、頸椎、腰椎の除圧を行っていました。一見非常に神経質そうな外科医に見えますが、手術が終わると“Incredible!!”と手をたたいて皆の協力を讃えるざっくばらんな人物でした。

写真 3.

11月13日、手術後にDr.KroppenstedtがKremenの近くのNeuruppinという町での夕食に誘ってくれました。その道中、彼は壁崩壊前には東ドイツにあった町を数カ所案内してくれました。没個性的な建物が並ぶ町をドライブしながら、壁崩壊、東西ドイツの統一のことを話してくださったことが深く印象に残っています。

週末、Kremenから電車でHamburgを経由して、Sendenhorstに向かいました。このFellowship programでは電車で移動することが多くありましたが、ドイツの電車はドイツ人仕様（?）で座席が非常に大きく作られており非常に快適でした。またほぼ一周ドイツを電車で旅しましたが、車窓から見た壮大な景色は今も忘れられません。

SendenhorstではSt. Josef-Stift Hospitalを訪問しました。この病院の脊椎外科のChiefであるDr. BrinkmannとDr. Schultzは、物静かで哲学的なムードにあふれ、まさしく私が想像する“ドイツの脊椎外科医”という風貌でした。特にDr. Schultzが私たちの面倒をみてくれましたが、初日は“今日はゲストが来ているので手術室内でドイツ語は禁止”とスタッフに命を下して私たちを歓待してくれました。

Dr. Schultzが執刀するPLIFの手術に何件か参加しましたが、“手術はいつも同じことをする”というのが彼のモットーだそうです。Dr. SchulzをはじめSt. Josef-Stift Hospital脊椎外科は、Sagittal Alignmentのことについての知識も多く持っていますが、手術では罹患高位の除圧と不安定性を固定することに重きが置かれており、この姿勢は非常に共感できました。

St. Josef-Stift Hospitalはとにかく病院自体が組織化されている印象でした。手術は別室で麻酔がかかりすでに体位がとられた状態で患者が運ばれてきます。術後はその体位のまま回復室に移動します。ベッドなどは全て電動化されており、Man Powerを削減する工夫が随所に見られました。毎日夕方にはカンファレンスがあり、その日の手術のfeedbackと、翌日の手術のDiscussionが行われており、これは非常に日本の病院と通ずるものを感じました（写真4）。

写真 4.

次にCologneを経由して、Koblenzに向かいました。Cologneは大聖堂で有名ですが、ビールでも有名です。フランス人はワインに強いこだわりを持っていますが、ドイツ人は信じられないくらいビールが好きです。そしてまた、ドイツの少し塩っ辛い料理が、なんともビールにはマッチしますし、いくらでも飲める感覚にさせてくれます。私も決して下戸ではなく飲める方とは思っていましたが、今回フェローシップに一緒に参加した吉沢先生、釜付先生、(特に)浅利先生はとんでもない酒飲みで、全くついていけませんでした(写真5)。レストランなどでこれでもかとビールを飲んでフラフラになった後でも、ホテルのロビーでまたさらに酒盛りをしており、筑波、岡山、弘前の人たちは一体どうなっているのか何度も不思議になりました。

写真5.

Koblenzはモーゼル川とライン川が合流する地点に位置する美しい町です。エーレンブライトシュタイン要塞に続くロープウェイが町のひとつの観光名所ですが、私たちの滞在時は冬季のため運行しておらず少し残念でした。しかし、町はクリスマスマルシェもオープンしており、1年前にベルリンを訪れた時のことを思い出しました。

KoblenzではCatholic hospitalを訪問しましたが、その名のごとく教会を改築した病院です。そのため、現在でも病院内に礼拝所があります。Catholic hospitalの脊椎チームのChiefであるDr. Killianは快活なラテンの血を感じる脊椎外科医でした(写真6)。彼も非常に鮮やかな手つきで手術をこなしますが、3椎間のACDFを1時間半で終わらしてしまいました。左手をまるで利き手のように使うので“なぜそんなに器用に左手が使えるのか?”と尋ねると、“ドイツの脊椎外科医は1人で手術をするように教育されるので、左手を使えるように練習する”とのことでした。

写真6.

当初予定されていた3施設での研修を終了し、11月30日にTuttlingenに移動しAceclupのFactory TourとReview Presentationを行いました。翌12月1日にはスイスのZuerichに移動し、帰国の途につきました。

いつもヨーロッパを訪れて感じることは、地続きの国境を越えるだけで言葉・文化が変わる、我々日本人には体感することができない特性を持っており、それがヨーロッパのおもしろさだと毎回感じさせてくれます。私はBerlinしか訪れたことがありませんでしたが、この3週間でドイツの色々な町を訪れることができたことは貴重な経験となりました。ドイツ人はやはり他のヨーロッパと比べて非常に勤勉で時間にもきっちりしていますし、レストランや店舗でのサービスも非常にいきとどいている印象で、日本と近いものを感じます。脊椎の手術に関しても(前述しましたが)、フランス、スペイン、イタリアなどではSagittal Aligmentの流れにのっとったCorrective Long Fusionが主流だとは思うのですが、今回訪問した施設ではSagittal Alignmentは考慮するものの、重きは罹患高位をしっかり除圧固定することにおかれており、これも日本人の考えと共通するものがあるのではないでしょうか。

最後に、このような貴重な機会を与えていただいた根尾教授、フェローシッププログラムが滞りなく行なわれるよう心を砕いていただいた事務局、Acaclupのスタッフの方々、そしてフェローシップ中に大笑いさせてくれた吉沢先生、釜付先生、浅利先生に深謝いたします。